

秋季特別展

# 『日光東照宮と秋元三代』開催中



「秋元泰朝画像」(照尊院蔵)

甲州谷村の初代藩主、秋元泰朝は、十五歳のとき徳川家康に仕え、才能を見いだされて、側近として活躍します。家康が没した際は、久能山への埋葬や日光への改葬にもつき従い、その後は日光の管理にあたるとともに、將軍秀忠や家光にも重用されました。また、谷村藩主としても、谷村大堰の開削や谷村の城下町の整備など、領内の発展につとめました。

寛永十一年(一六三四)、泰朝は日光造営奉行を命ぜられ、九年の歳月をかけて、現在見ることでできる壮麗な建築を完成させました。寛永十九年九月、決算書である「日光山東照宮造営帳」を提出した泰朝は、その一カ月後の十月二十三日、江戸の藩邸において、六十三歳で亡くなりました。



「東照社縁起絵巻 第四巻」(日光東照宮蔵)

三代將軍家光が臨席して行われた、東照宮社殿の落慶法要が描かれています。



「日光山道中図絵」(日光東照宮蔵)

会期	10月28日(日) まで
開館時間	午前9時〜午後4時30分 (入館は4時まで)
休館日	9月3・10・17・18・25日 10月1・9・15・16・22日
観覧料	一般 600円(420円) 高校・大学生 400円(280円) 小・中学生 200円(140円)
( )内は20名以上の団体料金	

「無之字槍」(秋元家蔵)  
秋元泰朝が、大坂の陣のとき、家康から拝領したもので、秋元家の家宝とされています。



M T  
MUSEUM TOKUGAWA  
募集・問合先  
都留市博物館  
「ミュージアム都留」  
☎(45) 8008  
☎(45) 8608

ミュージアム都留寺子屋講座より

第一回芭蕉月待講座「甲州に逃れた俳人たち」の要旨をご紹介します。

## 「小川破笠 — 甲州を放浪した細工師 —」

天和三年(一六八三)、芭蕉が俳諧の弟子である谷村藩家老高山伝右衛門(俳号・樂時)に招かれて、谷村に逗留しているのに、その後谷村で蕉門の活動が認められないことに疑問を感じる方も多いのではないのでしょうか。

当時甲州の俳壇は岸本調和とその門弟によって、甲府を中心に展開されていました。調和は門弟を多く抱え、甲州国中の俳壇を組織化していききました。

しかし、芭蕉は性格上、門弟を組織化していくような結社的活動はせず、樂時とも弟子とはいえ風流なつきあいをもち、調和とは対照的でした。

天和・貞享の頃、芭蕉は自らの俳句の世界を確立していききますが、この頃、芭蕉の周辺には優秀な人材が集まっています。その中に、小川破笠という人物がいます。破笠細工と呼ばれる美しい細工を作った細工師であり、また江戸俳人で、芭蕉・其角・嵐雪らと親交を結んでいました。二代目市川團十郎とも友人で、團十郎の日記「老いのたのしみ」には破笠が二十三ないしは四歳の頃(貞享初年の頃)、「翁(芭蕉のこと)は六十有余の老人」に見えたと言語っていました。

翁と称された芭蕉は、当時四十歳にすぎませんでしたが、老成した雰囲気があり、いまだ青春時代にあった其角・嵐雪・破笠らにとり、いかにも近寄り難い雰囲気があったようです。破笠は「嵐雪なども俳壇の外は翁をはづし進など致しよし。殊の外気がつまりおもしろからぬ故」とも打ち明けています。

破笠が何を考えていたのかは知る由もありませんが、当時、諸国を放浪することもあったようです。甲州に足をのばしたときに詠んだ俳句に次のようなものがあります。

甲斐山中にさまよひける夜、宿かりぬべきかたもなく、  
刀さげてあやしき霜の地蔵哉 (萩原業平)

人生に悩み、流れていた時期の破笠の心境が伝わってきます。

放浪時代の破笠の動向は全く分かりませんが、放浪しながらも細工の勉強をしていたのでしょうか、のちに世に出てきたときには細工師となっていました。そして、その後さほど時を経ずして、茅ヶ崎の津軽家にお抱え細工師として迎えられます。

当時の甲州では破笠や山口素堂よりも調和の名が知られており、甲州で蕉門が花開くことはありませんでした。芭蕉自身ですら、同時代的にはそれほど知名度がなく、弟子が九州で芭蕉の名を出したところ、女のような名前だということであられたというエピソードもあります。

芭蕉の死後、その名はしばらく弟子たちによって紹介され、のち享保年間(一七一六―一七三五)になって、获生徂来ら漢詩壇の人々の主導によって芭蕉復古の思潮が起り、その名が知られていきました。

### 第三回芭蕉月待講座

## 「山口黒露 — 本格的な甲州俳壇の形成① —」

日時 9月25日(火) 午後8時30分〜7時30分